

グルマーイについての熟考

私の心の洞窟への旅

メグナ・カルバージョ

2012年9月、私は訪問セーヴァイトとしてアルゼンチンからシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムに来ました。ある日、私はサツァングに参加するためにシュリー・ニラーヤ・ホールへ行く途中でグルマーイに会いました。私は手染めのガネーシャの絵のついたTシャツを着ており、グルマーイはすぐにそれに気づきました。グルマーイは、私のTシャツを身ぶりで示して、どこで買ったのか尋ねました。

私は、その前年にインド南部のカナンガッドで買ったと言いました。グルマーイは、なぜそこに行ったのかと聞きました。私は、グルデーヴ・シッダ・ピートゥで「心への巡礼リトリート」に参加した後、バデ・バーバがガネーシュプリー村に定住する前に何年も住んでいた洞窟を訪問することに引かれ、カナンガッドに行ったことを説明しました。

グルマーイは、私の旅に興味を持ったようで、私にシッダ・ヨーガのアーカイブであるシャクティ・プンジャのために記事を書くよう言いました。グルマーイは、もし私が写真を撮っていたら記事に添えるよう付け加えました。

私はグルマーイからの要望を光栄に感じ、カナンガッドを心の中で再度訪問するという考えにとっても興奮しました。まるでグルマーイが私と一緒に来てくれるように感じました。私は喜んでグルからの宿題を受け入れました。

その夜、私は自分の旅で覚えていることを記録し始めました。洞窟での体験にたどり着いた時、私は自分がその旅のさまざまな瞬間を追体験し、当時は見過ごしていたことや忘れていた細かい点に気づくことを、発見しました。

バデ・バーバがかつて住み瞑想していた洞窟は、カナンガッドから 5 キロほど離れた、グルヴァンとして知られる地域にあります。グルヴァンとは、「グルの森」という意味です。私は、深い森から出て、岩だらけの丘の中腹を登ったことを思い出しました。私は、シダで覆われた尾根を進んで、洞窟の入口に着いた時の興奮を再体験しました。

追体験ですが、今はより大きな気づきと明らかな認識がありました。記憶がどんどん私の内側深くから湧き上がってきました。それは洞窟の入口近くの岩の後ろからほとぼしる水の流れのようでした。私は、宿題という贈り物をグルマーイに非常に感謝しました。

私は、少しもためらうことなく懐中電灯で行く手を照らしながら洞窟に入ったことを思い出しました。洞窟は暗くじめじめしていました。入ってすぐの所に大きな平らな石がありました。私は、そこに横たわり深い瞑想に入っているバデ・バーバを想像できました。その時、グルマーイの声が私の内側で聞こえました。「進みなさい。もっと深く入りなさい」

そして私は、そうしました。洞窟のさらに深くへとつながる狭い穴をはって進みました。床は冷たく、道はさらに狭くなっていきましたが、怖くはありませんでした。グルマーイの存在が私に進み続けるよう促しているのを感じました。ついに、狭い穴から小さな部屋に着きました。グルマーイに私を洞窟の中心と思われるところに導いてくれたことに感謝して、私は瞑想のために座り、私の周りの静かで快い暗闇がすべての思考を溶かしていくのに任せました。

私は、バデ・バーバの存在が私の体のすべての細胞で脈打っているのを感じることができました。私は、金色の光と愛に包まれているように感じました。私はその光、その愛の中で休息しました。

シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムでの毎日、私はカナンガッド訪問を思い出して書くというグルマーイからの要望に従いながら、コンピューターを開ける前、森の中の洞窟に再び深く入っていく自分をいつも思い描きました。そしてそこで少しの間瞑想しました。そうすると、まるで自分が深遠で神聖な旅をしているように感じました。まさにグルマーイの声によってグルヴァンの洞窟の中心へと導かれたように、訪問記を書くというグルの要望に従うことが、今、私を自分の内側深く、自分の心の洞窟に導いているのだと体験しました。私は、平和、豊かさ、そして満足感の源を見つけていたのだと感じました。そこは、いつでも気軽に戻ることができる神聖な場所であり、グルの恩恵の贈り物でした。

数日後、私はグルマーイに再び会いました。今回は、グルマーイは私がどのように記事に取り組んでいるか尋ねました。私は「すごいです！」と叫び、カナンガッドへの訪問をどれほどよく思い出し、感謝しているか、どれほど当時、気づいていなかったか、ということの驚きを伝えました。

グルマーイは笑い、愛情のこもったまなざしで、「あなたはシェイク・ナスルディンみたいですね」と言いました。その日遅くに、グルマーイが語る「シェイク・ナスルディンと彼のロバ」の物語がちょうどシッダ・ヨーガの道のウェブサイトに乗ったことを聞きました。その物語を読んだ時、内なるほほ笑みが私の存在と私の理解を照らしました。

その物語の中で、スーフィーの伝統の登場人物ナスルディンは、彼の年老いたロバを競売に掛けようと思い、市場に連れて行きます。

競売人が見込みのある買い手にこの動物を褒めちぎっているのを聞いた時、どういう訳かナスルディンはこの動物に新たな価値を認め、結局、自分で買い戻してしまうのです。

私はその関連性にあっけにとられました。グルマーイが私のカナンガッドへの訪問に興味を示し、私にそのことについて書くよう言うまで、私は自分が驚くべき場所に導かれ、そこで宝物のような体験をしたことへの深い感謝を抱くことができなかつたことがよく分かつたのです。

グルマーイの要望に取り組むことは、私にとって視点の大転換の始まりとなりました。それ以来、私はより一層意識的であるようになり、自分の人生とサーダナーへのより繊細で深い理解を培うようになりました。今は、大いなる心とつながれば、感嘆すべきことを認識できると分かります。例えば、私がシャクティ・プンジャのためにギャラリーで写真を集めたり検討したりしている時、まるで多次元の感覚的体験の中に飛び込んでいるように感じました。自然の香りを吸い込み、ジャングルや滝などのさまざまな音を聞き、すべての中の神聖なる存在に同調するのです。近ごろ、毎朝近くの自然保護区を散歩している最中、私はその風景をまるで初めて体験するようになります。自然という寺院の中を歩き回り、そこで神の存在とつながることができることに、敬意と感謝を感じるのです。

私はまた、いかに簡単に人生の多忙なペースに巻き込まれ、祝福されている自分を忘れてしまうかにも気づきました。カナンガッドでの体験を思い出すことは、少しばかりの立ち止まる努力と、日常のささやかな、しかし驚くべき数々の事柄に本当に気づいていく努力が必要であることを、私に理解させてくれました。例えば、1杯の温かいコーヒー、子どもたちの笑顔、雨音、日光、自宅で焼くチョコチップクッキーの香り。もし私がそのような小さな事柄をよく見る練習をすれば、一日中、感謝とつながることでしょう！

何より、私は今、この祝福されたシッダ・ヨーガの道を歩く中で、グルマーイが私を導いているという素晴らしい幸運に、かつてなく深く感謝しています。グルの導きに従うことが、常に私を自分が住むべき場所——心の光の中——へと連れて行ってくれると信じています。このことを、私は一生感謝します。



© 2018 SYDA Foundation®. 著作権所有。